

出土遺物が語る八代の歴史

私たちが暮らす地面の下には大昔の人たちが使った道具や、建物の跡などが眠っています。八代でも現在までにコンテナケース 1 万箱ほどの土器や石器などが発掘・保管されています。今回はその資料の中から旧石器時代から古墳時代までの資料をご紹介します。

1. 旧石器時代（3 万 5 千年～1 万 5 千年前）

現在確認されている日本で最も古い遺跡は約 3 万 5 千年前（4 万年前とも）のものです。平成 21 年に、島根県出雲市の砂原遺跡で 12 万年前の地層から石器が出土したとの報告もありますが、その評価はまだ定まっていません。

八代では氷川町の立神ドトク遺跡で約 2 万年前のナイフ形石器・細石刃さいせきじんなどの石器がみつっています。

2. 縄文時代（1 万 5 千年前から 3 千年前）

今から約 1 万 5 千年前、日本列島でも土器が使われるようになりました。縄文時代の始まりです。土器を使うことで、煮炊きや食物の保存が可能になり、食生活は豊かになり、定住生活ていじゅうせいかつも可能になりました。

八代では東陽町や泉町、二見の山間部で石鏃せきぞく（矢尻）や、ナイフとして使う石匙いしさじ、伐採用具の石斧ばっさいなどが採集されています。

また縄文時代早期の押型文土器が西平貝塚（氷川町高塚）でみつっている他に、早期から晩期の（11,500 年前～3,000 年前）各時期の土器が有佐貝塚ありさかいづか（鏡町有佐）、田川内貝塚たのかわちかいづか（日奈久新田町）、産島貝塚うぶしまかいづか（古閑浜町）などの貝塚でみつっています。八代では縄文時代の集落遺跡はまだみつっていませんが、貝塚の周辺などには、人々が暮らしていたと考えられます。



石鏃 二見内野遺跡出土 縄文時代



石匙 二見内野遺跡出土 縄文時代

3. 弥生時代（3,000 年前～3 世紀前半）

約 3 千年前、大陸から北部九州に本格的な水田稲作すいでんいなさくが伝わり、弥生時代が始まりました。水田を営むため、人々の生活の場は平野が中心となり、穀物の備蓄こくもつが可能になったことで、貧富ひんふの差が生まれました。

八代市内では近年まで、弥生時代の集落は見つかっていませんでした。しかし、平成 12 年に始まった九州新幹線建設に関わる大規模な発掘調査で弥生時代の八代のイメージは大きく変わりました。熊本県唯一のしょうどうたく小銅鐸、せいどうせいやりがんな青銅製鉋などの多彩な出土品や、弥生時代前期（紀元前 8 世紀～紀元前 4 世紀）の島田遺跡 26 号住居跡をはじめ 100 軒を超える住居跡が見つかりました。新八代駅周辺にはで連綿と集落が営まれていたのです。

小銅鐸
上日置女夫木遺跡出土
弥生時代中期
紀元前 4 世紀～紀元前 1 世紀



4. 古墳時代（3 世紀後半～7 世紀）

古墳時代、日本列島各地に規格化された巨大な墳丘をもつ墓（古墳）が造られました。大王や地方の豪族たちは、自らの権力の証、ヤマト王権に属するしるしとして前方後円墳を中心とする古墳を造ったと考えられています。

八代最古の本格的な古墳は、4 世紀に造られた大鼠蔵楠木山古墳です。この後、大鼠蔵・小鼠蔵・産島・高島など、八代海に浮かぶ島々に古墳が造られていきました。

田川内 1 号墳（日奈久新田町）からはイモガイ製、大鼠蔵東麓 1 号箱式石棺からはサラサバテイ製の腕輪が出土しました。これらは、日本列島近海では奄美や沖縄などの暖かい海に生息する貝です。イモガイは腕輪の材料として、弥生時代から九州の権力者たちに大変好まれ、現在「貝の道」と称される海上輸送ルートが存在していたと考えられています。一方、サラサバテイは美しい貝ですが、壊れやすいので腕輪の材料として普及せず、九州では本例しか見つかっていません。そのため貝の道に直接関わっていた人のみが入手できたと考えられています。島に古墳が多く造られたこと、サラサバテイ製の腕輪が出土していること、古墳時代には八代平野が現在の 3 分の 1 の広さしかないことから、古墳時代の八代の権力者たちは、貝の道に関わり、海運力によって富を得た人々だったのではないかと考えられます。

また 6 世紀に築造された八代大塚古墳（上片町）は、6 世紀の九州西岸の最南端に築かれた前方後円墳で、人物埴輪をはじめとする形象埴輪など、多彩な出土遺物が見られ、どのような人物が葬られていたか注目されています。



人物埴輪頭部
八代大塚古墳出土
古墳時代後期 6 世紀



サラサバテイ製の腕輪
大鼠蔵東麓 1 号箱式石棺出土
古墳時代中期カ 5 世紀カ